

生徒のナラティブ・コンピテンスを評価するための、
マテリアルベースでオープンエンドなライティング・タスク
Material-Based and Open-Ended Writing tasks for Assessing Narrative Competence Among Students

Monika Waldis, Jan Hodel, Holger Thünemann, Meik Zülsdorf-Kersting, Béatrice Ziegler

千葉県立姉崎高等学校 山村向志

bnfrh411@yahoo.co.jp

I. 著者紹介

・ Monika Waldis

スイス・アラウ教員養成機関 (FHNW) 研究助手、教師教育者。

研究テーマは、歴史と市民性教育、歴史教師の専門的能力開発とそこでの評価研究。

・ Jan Hodel

スイス北西部応用科学大学中等教育研究所 (FHNW) 歴史教育分野講師。バーゼル大学で歴史生徒物学、地理学の修士号 (1995 年) と歴史学の博士号 (2013 年) を取得。

・ Holger Thünemann

ケルン大学歴史学部教授。2012 年までミュンスター大学で講師を務める。2012 年から 2013 年までフライブルク大学で歴史学部の教授を務めた。研究テーマは、歴史文化、歴史教科書研究。

・ Meik Zülsdorf-Kersting

オスナブリュック大学文化地球科学部教授、研究テーマは歴史教育、歴史的思考

・ Béatrice Ziegler

スイス・アラウ教員養成機関 (FHNW) に所属、研究テーマは公史と市民性教育

II. 重要な用語

- | | |
|------------------------|-------------------|
| ・ Narrative competence | ナラティブ・コンピテンス |
| ・ historical narrative | 歴史的ナラティブ |
| ・ writing task | ライティング・タスク (記述課題) |

III. 議論したい点

- ・ 生徒にとって馴染みのあるトピックを扱うことが記述の質 (資料に言及しながらの記述。用語の適切な使用、事象間の因果付けなど) の向上に必ずしも繋がらない点は興味深い。筆者も述べているが、今回の事例で言えば、ドイツ語圏に住む生徒にとって国家社会主義 (ナチズム) はなじみ深い (センシティブな?) 内容であったため、資料の読解や、歴史的な事実の説明よりも価値判断に重きをおく傾向があったことがその要因として考えられる。生徒にとってなじみ深い、あるいはセンシティブなトピックを扱いつつも、記述の質 (資料への言及、用語の適切な使用、事象間の適切な因果付けなど) を保証するためにはどのような方策が考えられるか。
- ・ 調査結果によれば生徒が執筆した文章には「歴史的な問い」の出現率が少なかったことがわかっている。歴史の「語り (Narrative)」を記述させる中で、生徒に「歴史的な問い」を立てさせるためにはどのような働きかけが考えられるか。

IV.概要

○導入 (p. 117)

- ① 歴史的ナラティブの構造を理解したり、一貫したナラティブを再構成したりするにはナラティブ・コンピテンシーが必要となってくる。(オーストリア、ドイツ、スイスではこのコンピテンシーモデルが開発)。

※ナラティブ・コンピテンシー：時代を越えた出来事間の関連づけから、断絶した出来事や史料にみられる矛盾を時代展望において重要なまとまりへと結びつけ、歴史を作りだす(語る)能力

- ② ナラティブ・コンピテンシーの概念化はいまだ曖昧であり、本稿ではナラティブ・コンピテンシーの4つの異なるサブオペレーションを区別する歴史的思考のモデルを提示し、このモデルを経験的にテストするように設計された研究について報告する。

○理論的背景 (pp.117-118)

- ① ハスベルクとケルバー(2003)は、歴史的思考の2つの操作を説明している。

→(1) 歴史的物語を展開する能力

(2) 過去に対する自分自身の概念や態度を認識し、それらを発展するために、既存の歴史的ナラティブの構造を理解し、批判的に問いを立てる能力

- ② 彼らの理論的貢献に基づいて、本研究ではナラティブに関わる能力を4つの操作間の相互作用として定義する。

→(1) 歴史的な問いの形成

(2) 歴史的な資料や説明に基づく分析

(3) 事実に基づいた歴史的判断(歴史事象を因果関係で結ぶなど)

(4) 歴史的価値判断

- ③本章では、このモデルに基づいて歴史的思考を評価するデザインを説明する。

○リサーチクエスチョン (pp. 118-119)

- ① 研究では、歴史の評価課題に対する生徒の物語の構造と質を調査した。

- ② 物語を研究する上で、主に2つの方向性を追求した。

(1) 物語の構造の中に見られる中心的な要素(歴史的思考)の特定

(2) 学習主題ごとの生徒のナラティブの質の評価

→リサーチクエスチョン

・歴史的思考のどの側面が記述内に現れているか?

・調査対象(記述)の中に歴史的思考の4つの思考操作全てを含む文章はどれくらいあるか?

・そのような記述は、4つの操作(1)~(4)の観点から質的に評価できるのか?

・学習主題や記述の形式は、文章内に示される生徒の物語のパフォーマンスにどの程度影響を与えるか?

○研究方法 (pp. 119-122)

実験教材

- ① 生徒の歴史的思考を評価するために、選択した資料に基づいて歴史的な物語を作成するよう生徒に求める課題を設定。
→2つのテーマ別テスト冊子を作成
(1)16世紀から17世紀にかけての「日本とヨーロッパの貿易関係」
(2)1933年の「ナチスによるユダヤ人企業への不買運動（国家社会主義：ナチズム）」
- ② テキストの構成
第1部：学習トピックへの関心、歴史に対する学問的な自己概念を評価する問題がいくつか含まれている内容。
第2部：各トピックに関する史料と歴史の説明が含まれており、生徒は3段階の指示を受けた。各資料（史料と歴史の説明）を読み込む→資料（史料と歴史の説明）についての質問を考える→どれが「史料」でどれが「歴史の説明」なのかを判断する。
第3部：掲載されている資料を用いて文章を書くことを求める内容。3種類の文章の形式が提案。
(a) パネルディスカッション (b) 学校新聞の記事 (c) ブログ記事
第4部：生徒たちが自分の記述プロセスをクローズド・エンドの質問で振り返り、個人情報（年齢、性別、第一言語など）を報告するよう求める内容

調査対象

- ① 調査対象者には、スイスとドイツの3つの町（Aarau, Münster, Osnabrück）から選ばれた193人（計9クラス）の生徒が含まれていた。
- ② 参加したクラスは、9年生が4クラス、10年生が3クラス、11年生が2クラスであった。したがって、生徒は15歳～17歳が中心であった。

実験の実施

- ① 実験は通常の90分の歴史授業の中で行われ、本論文の著者とその研究スタッフによって実施された。
- ② 生徒は授業の最初にテスト冊子を受け取り、自分のペースで学習した。各クラスの生徒の半分は「日本」のテスト冊子を、残りの半分は「国家社会主義」のテスト冊子に記入し完成させた。

自由記述式の生徒の文章の分析

- ① データ分析には、質的分析法である「内容分析（Content analysis : Mayring, 2007）」と「高推論評価（High-inference rating : Clausen, Reusser, & Klieme, 2003）」の2つの方法を用いた。
- ② 「内容分析」
各ナラティブの議論パターンと構成要素を特定するために、分類手順を採用した。符号化単位は「文」とした。歴史的思考の4つのサブオペレーション（歴史的な問いを扱う、歴史的事実を扱う（歴史的资料を参照するというコードに変更）、事実に基づく歴史的判断を扱う、歴史的価値判断を扱う）を区別し、コード化した。

③ 「高推論評価」

「内容分析」によるコーディングに続いて、先行研究によって歴史的物語にとって重要であることが明らかにされた 7 つの質的特徴を評価するための高推論評価（事実分析の一部としての「歴史史料の参照の質」、事実分析と歴史的判断の一部としての「事実的正しさ」、歴史的価値判断の一部としての「規範的妥当性」）のコーディングを実施した。

○結果 (pp. 122-126)

文章の長さと形式

- ① 文章の長さは 1 文から 33 文まで様々であった。平均は 11.4 文であった。
- ② パネルディスカッション用の文章を書いた生徒は 16.1%、ブログを書いた生徒は 29.0%、生徒新聞の記事を書いた生徒は 34.7%、明示的な文章形式を選択しなかった生徒は 19.7%であった。

生徒の歴史的思考

- ① 全体の 5 分の 4 の文章には 1 つもしくは複数の資料への言及が含まれており、ほとんどの文章には「事実に基づく歴史的判断」や「歴史的な価値判断」が含まれていた。歴史的な問いはそれほど頻繁ではなく、約半数のテキストには歴史的な問いは含まれていなかった。
- ② 多くのナラティブが価値判断 (37.6%) に達していることが明らかになった。さらに 22.6%が歴史的事実の説明に焦点を当てていた。13.9%のテキストは、事実に基づく歴史的判断に焦点を当てていた。歴史的な問いを立てることによって議論を先鋭化させているような文章は、少数のテキストでしか確認できなかった。

歴史の意味を理解する

- ① テスト冊子のトピックである「国家社会主義」(コア・カリキュラム)と「日本」(ノンコア)が、4つの歴史的思考操作の頻度とどの程度関連しているかを検討した。
- ② 資料の参照数、歴史的疑問文のテキスト数、事実判断など、様々なカテゴリーの出現率の差を分散分析したところ、トピックに関連した有意な差は認められなかった。
- ③ しかし、歴史的価値判断は、日本に関するものよりも国家社会主義に関する生徒の語りの方が多かった。

文章形式がナラティブのパフォーマンスに与える影響

- ① 歴史的資料の参照(資料への言及)は、ブログ形式の文章や特定の形式ではない文章よりも、新聞記事への投稿文章により多く見られた。
- ② 歴史的価値判断は、形式の指定されていない文章より、パネルディスカッション形式の文章、ブログ形式の文章により多くの頻度で現れていた。

○考察 (pp. 127-128)

- ① 特に興味を持ったのは、トピック（コア・カリキュラム：国家社会主義、ノンコア：日本）と記述形式（パネルディスカッション、ブログ、新聞記事への投稿）が、記述内に見られるコンピテンシーと関連しているかどうかであった。
- ② 学校カリキュラムや国の歴史文化に定着している「国家社会主義」についてのテキストと、「日欧貿易関係」についての記述の質に有意な差はなかった。
- ③ 生徒が国家社会主義についての歴史的事実、事実判断、社会的に望ましい価値判断をすでに熟知していたため (Meseth, Proske, & Radtke, 2004)、説得力のあるナラティブを作るためには、史料や説明の精査はもはや必要ないと考えていたことが要因として考えられる。
- ④ ナラティブの能力を理解するために、資料ベースの自由記述課題を用いた今後の研究では、国家社会主義のようなあまりにも生徒にとって馴染みの深いトピックは、テストの状況で資料を調査的・探索的に使用することを促す上で（つまり生徒がナラティブの能力を発揮できるようにする上で）、限られた価値しかない可能性があることを考慮に入れておく必要がある。
- ⑤ 文章形式の影響については、パイロット研究の結果から、記述課題の設定には慎重な検討が必要であることが示唆された。歴史資料を明示的に参照するという方法論的な要件を満たすために「ブログ」をフォーマットとして使用することは、ミスリーディングを招く（歴史資料に言及しない記述になる）ことが判明した。

ⁱ 宇都宮明子（2017）「歴史意識を育成する歴史教育論の構築に関する考察 — 日独の歴史教育学研究の検討を通して —」，佐賀大学教育学部研究論文集， 2巻 1号 ，pp.8